上演６　青森県代表
青森県立弘前南高等学校
作　川村香奈子
「サヨナラさんかく」

講評文　宮城県角田高等学校　佐藤桃子

　SSで学校の空間を表現していた。
　ラスト図書館の空間がブルーであり、カエデ、タイガ、マヒロの悩みや苦しみの感情を表現していた。しかし、柿崎が登場したことでブルーから明るくなり、そこで感想文を読んだことで図書室にいた人物たちの心も同時に晴れたのだと思った。

　空気を読まなくて他人の心と向き合うのが苦手だった柿崎が、たくさんの人と対話することで人や自分のことを理解していく点が星を転々とし星の住人たちと対話する星の王子さまの構成と似ていた。

　この劇では、リンカがみんなの憧れ、優しくて綺麗なスーパーアイドルだったのに実は少し嫌味で意地悪なところがある人であったり、カエデが柿崎との対話では少し強気なところがあったが実はクラスメイトには強く言い切れずにギクシャクしていたりなど、人の心や態度の表裏、相手にもそして自分自身も受け入れづらい「トゲ」の部分が登場人物それぞれに描かれていた。登場人物がみんな星の王子さまでいう薔薇であり、近付くと傷つけあってしまうジレンマを抱えるやまあらしでもあったと思う。

　その中で、本を読むことは自分と向き合うこと、というセリフで柿崎は自分の「トゲ」の部分と向き合い、また他人の「トゲ」についても考えることで、ラストではもともと苦手だった他人の気持ちや自分の思いなどの理解ができたからわからなかった感想文の書き方がわかり、感想文を書き上げることができた。また、マヒロもタイガに柿崎と足して2で割るとちょうどいいと言われ、柿崎という他人から逃げるのではなく柿崎の「トゲ」を受け入れ、最終的には笑って追いかけっこができるようになっていったのだと感じ、じんわりと心が暖かくなった。

　星の王子さまの人物たちやこの物語の登場人物たちのように、どんなに優しくて、素晴らしいと思えても生き物である以上は誰にでも欠点や「トゲ」があって、でもそれで傷ついたからと言って跳ね除けてかかわりを断つのではなく、傷ついてもまた何度でも身を寄せ合おうとする、理解しようとすることで少しずつ相手のこと、自分のことが見えてくるコミュニケーションという行為の大切さ、他人と自分をまとめた全ての人間との関わり合い方を改めて強く考えさせられ、それができることのすばらしさ、尊さを再認識できる劇だったと感じる。